

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 •

JAPAN

繪本
歎討
岩見英雄錄 三編 貳

遠
2509
35-16



遠
2009
35-16

繪本復讐英雄錄三編卷之二

椎松左平義心之事

居見因抱の者傷小縲絏とまぬ。士たるの扱ひよめ事より
縲絏と解ふもくに下毛の玉板橋の使家椎松左平す。者
玉経亡命のあとす。そもやかニ浦への書を及ひ言
方へも遠一とむかみふ。見えまく所よ遙逝す。
う。急き難と過事と知。且玉経が義と缺點と報せば
して物がゆりと千石とくらしも切なうが。文外す
けれども小差感まゆ。あそれまで遙ニ浦西で見る
南経てゑ書所るとひ。玉経が代りてあづけとくらしも
遙玉経行と号へ。若く因抱があとと遙て一臂のうと

流さんとあひ生れ城後路へと志己小登とすうれしもは頃
官跡うち序アーチ者をうる。途中あああらが一個の武士ふ伴
うちれて行しう遠くと云て被く。傍の因抱裏羽とさうと
壁と追うよと直に佛院浦をよか。日暮び白云
ふあり。ちゆり萬扇不休ひきうれ。毛縫の者の集て
絆ときけば頃思えんと号る者。東日浦の彼哥家とて居と
祀し。一婦人と連て七令をもと。楯家の城下みくろ
捕んと居て彼家を毎双の豪勇とて楯家の多勢と切
りびけ。ほかかあまうたうと。園守の竹糸針策と
お婦人と生捕うふより。先と。婦人の助命と乞が居る
自縄縄よか。嘗てかくあ薪義の者の東日浦よがて

りながら宿乎祀さんと。主勇と賞而止ざうさればを平
酒とおひて社奉安禮をとどめ外よ申なづれど
脇をうきよと。社祭よりそぞて。楯家の城下にて
着。吉田屋様と。のうる知音の有ねたりて。山石と巣合
とも。個修よ。樹中ふじきずれ。日々に呵責らされ共篤志ひも
う。いふや。や。う。と。や。一。う。と。平大よと。若や足食く人達ひ
をうんよ。や。う。と。が。か。ふ。う。か。と。た。平。山。山。と。う。と
波ひ知さんりのと。身と。も。と。あ。せ。れ。と。の。湖。か。と。う。と
高。谷。み。と。高。峰。と。も。と。心。と。う。と。や。て。主。修。か。と。ま。の。き
密。縛。と。乞。て。男。く。ん。因。抱。が。身。の。う。へ。と。ひ。ま。ひ。ら。う。と。縛

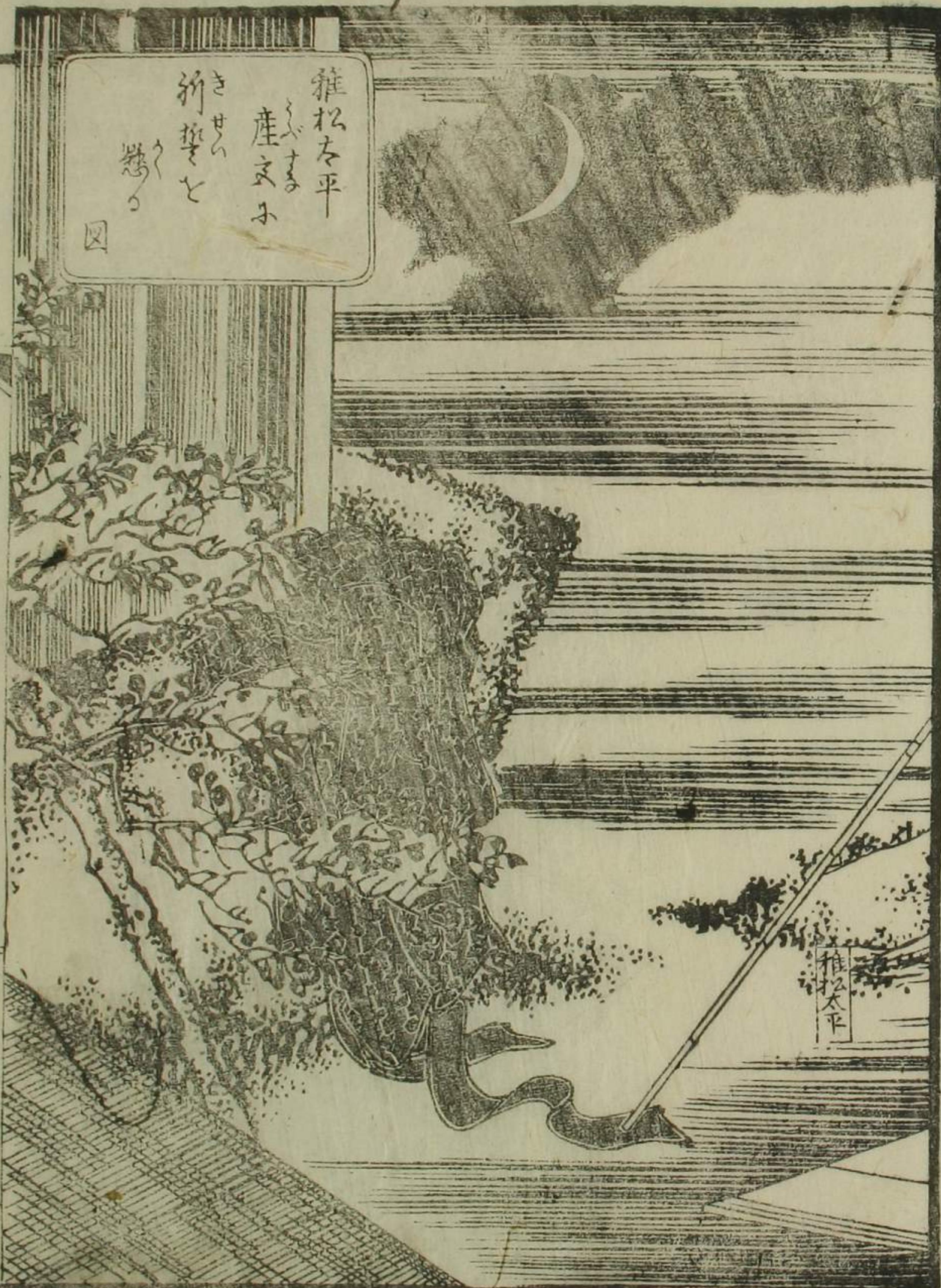
旦ち那官なり。三浦屋夫婦が情よりして己が心事とも語
つふもては同抱と赦ひ出さんとて涙と拭ひたのう。
片は多羽田屋修兵とりくらひまえ良嫁の府下の町人みて
代へ密舍を取活計をける。近きころまでハお撰と好み
みく。わハ下毛辺までむづき。放は雅松とも。引
知ちたり。多姓本納少主と放。世称せら
る程の老たれけりば。是ときより雅松が義弘と密
於器込因抱が事と。あれみく。年々もすくひ出
しんじく修兵とくらゐるが。伴ノ長臣
橋上野分政宗が郎へ年頃出入と有り。放先はく
穢いえあく。雅松と而思ふ。因抱が朱鷺及び。ナヌ又

と出たる額。妻細紀させ。且。主を市ふ。雅松ゆふ
面含せざりが様。年からうと書うじ。西翁が年
き。容碧へ。洋又紀うせ。修平是と憐みして。ひやゑ
摘上野分が郎。多姓家士因毛葉を湯小舟て。雅松が書付
と。頃出けれど。政宗奥よ岐よ。後。雅松を平とも石寄
田毛と。行焉禮をも翌日。再ち多羽田屋修兵とて
奇。多毛よう。内く頃ひの範。政宗聞らしけ。修兵許
の間志を平する者。多毛よ齒並べと育なれば。修兵雅
育者と謝して退。や平ふや修兵の報告をうまれば。雅松踊躍て
笑び。是全く。多修の平生樂をかう。上あも歌ゆくがゆくふ
笑ひ。修迷ひす庵をゆきて。修平ふあまく答謝して后

井の邊ふゆく。新水と浴く。音産えきる。大己貴命が御警と
うけく。岩見同抱が如牢を経びひく。又楯上野今
方よ移へ。政京は頼ひとと廻延し。まよ定る事や
ありけん。並は同列の士ふ商議て。多き因邊策を講と
百々仙石が郎ふつゝく。岩見同抱と川添の鷹へ引取し
也。是雅ねが頼ふよろとめり。全へ天孝子の寇城
あられみ。車くるりくろいもの半。

高野・孫彦房篇通覽之事

誠著うち野孫彦房舉奉へ。城下の嘉敷ふも。あくまく
奸計とめく。而く仙石がまと備て。岩見とくわんと
計渡うるが又正教は無れんの情思びがくをも。先政京を
毛もそく。使者の准備と居の折ある。仙石も居つとう
密使と云ふ。紙うる様へ。前日まうす作戦見しによう。彼の
因人廢榜向ふかげんと。欲の私重役ようの妙活と
一昨日も人とも。牢室へひき遷り。是牢くゆきく渡さる
毛の事。とあるべからず。毛は准備をも。無事べく欲をも
の居。云進べとせ。数度の縮縛を経しつつ。仍計を高野と
擇あらんと。報與から密使の手續は。孫彦房舉奉と
もうくび。厚意と謝而使者と返し。岩見と。縛石は奸智小
富たる者たりければ。熟思惟して。因人率後ふやうべて
穿空よ引極へ。たゞくらむひざる倒也。昔今。毛蟹も漁郎を
をそば。自身の一大事ふ及ぶん。先誠ふ使者とより。細ひ



とて。赤見軍六と己ヶ一族と唱。楯上野久政系が軍に
り。赤見將軍。義仲。一族系。久野軍六
と法。赤見將軍へ。序時も早く達成。久平因人。五率後
綱。ひ孫希奉と。云入る。それとも政宗。不勞かうとも。
軍六と對面。云鐵の首。見ふぬ。ひ返西兵移被
主。黒轍。往くとて。褐者と以て。奉。豪。そく。又仙石と
室發立。降て。形と告げあひ。そ。奉。豪。そく。又仙石と
謀らんと。ス。若干の食。予せり。復。赤見
軍六と。仙石が第。ふり。う。前日内志の原志と附合
ひ。彼。宿。旅と。呈して。后。中。入り。勝。昔。内。令。の。后。上。刑
古。跡。へ。云。入り。へども。主人。赤見の。板。と。未。坐。答。と。取。り。ば

舉。豪。車。己。又。月。と。城。て。の。岸。若。ふ。乃。び。赤。外。日。教。と。ま
ゆ。川。内。多。又。か。意。ひ。る。赤。が。く。大。掛。つ。國。平。古。平。済。小
なり。川。内。く。エ。少。合。せ。経。く。以上。の。原。志。と。希。ひ。と。總
を。原。く。身。と。漏。て。教。され。仙。石。好。利。良。慈。教。て。曰。佈。教。と
の。條。お。知。よ。原。う。ひ。是。よ。り。主。役。連。済。の。船。と。き。と。う
肉。く。云。進。べ。死。也。と。と。彼。宿。旅。の。れ。と。述。く。軍。六。と。返。す
け。が。そ。自。の。申。利。と。及。び。仙。石。又。密。の。書。と。教。軍。六。と
ぞ。報。た。舉。豪。大。ふ。勇。て。是。ぞ。岩。見。と。清。と。う。べき。時。月。の
分。り。穿。出。べき。か。う。と。軍。六。と。つ。そ。う。と。ぞ。セ。い。く。と。う。と。ば
仙。石。が。か。う。と。ぞ。岩。見。長。左。侍。の。好。利。赤。見。と。一。家。又。招。て
日。重。役。木。内。役。と。後。つ。と。ざ。表。ふ。知。さ。う。う。ち。み。う。う。う。

往りて車、第宵やうべきるまでりども独のサガ志
と蒙る多野氏の額をそへがく。且、併高ふ憲
而も度入りつゝ。毒云入ひ邊。彼一儀。肉く皆合せり如寒
はる。寧歎邊の者。右囚人と搜あり。肉く取物に事。
るをあつた後を。乃、更引か及び。独ども生首あ片
高年達何の使者と送られり。余人の殺ひの程
す。モ店舗への使者。以十一日。大城。停着
の日限とおどりて。至使者のゆうと結。座小囚人率渡
す。此の傍よねまうり。然が、薙着も。高年。以五日の内
きそり。事今より再く。古取かくづけ方。御ぐく
實小船。送たる事にさへ。ちる。と。ある件へ。使者と結

ちうた紀念とつれいが。幽霊の思なり。風ふてりと。内満と
漏して。第一されば。軍大總無よ絶び。とて。有轉。され
ども。また。曲をの緩く。とて。皆百計。の幽霊志。有
がくく。うらみ。跡を拂む。安堵。とて。待り。ん
仙石。小原志と。謝して。門と。歩うや。吾。と。中。ふ。汝。と。あ
れ。大車。ところ。そ。なう。て。り。と。紀石。内。志。の。よ。ざ。の。成
喘ぐ。かく。て。心。を。そ。ら。に。立。ま。く。と。跡。を。拂。あ。ざ。る。く
曰。あ。え。軍。六。舞。あ。舞。そ。是。空。て。寧。都。え。す。る。三。浦。を。う
追。人。と。か。け。ま。形。ひ。ゆ。か。く。ん。と。桺。吾。は。計。兼。と。竹。の。も。ぐ
事。と。三。小。室。を。並。た。り。其。一。黒。足。と。循。家。の。士。不。石。捕。せ

吾へより傷きび而勤務と奪ひ若くとくの終ふ擊る
と以上より。至二へ。勤務へもひれどりども。先と拂中少
ぬあぐせ十日苦痛の責は坐令。吾懲然とばたと云ひ
中とくらまこと新園は旅。先と倒びとりて半途
ふして幸。病頭し。吾倚着半小逃走去。足とて。
今正絃へ獲されども。外第へ中不居たゞ。今さう争
例す不及ん平と。小股自次と。又二年次より
來う。折絆す。次井と裏の一間み折く。都とひそちて
曰各師弟同文の好と捨ぞ。遂に独者と相あひる
泰の程祝焉致せり。主助力小僧と惡しとあく。岩見
稚季と死地よ陥りれ。縄縛縛の苦と。あくへたをば

窮憤良解ふつゝれ。猶ひ今密計已は廢形よりん
とされば。すみやくには地と見て二軒松とて扇合やべき
間をひそむ。主准備ありべしと。若干の金手どりして
路費小配高賀。以上へ只悪なく回里小歸ると仍上と
モ也と。従まつて。右耳とめづら。密計とさへかね定め
わざと太平富貴の奴僕より事とあくびして主齋東
だ。武具をも小ひつるまゝ。主准備。次の間小移せ。あく
客飯の主よ命而佳肴夥々。網せしめ。奥の一間よ旅
各酒宴と。催けよ先。中央うし。主野。旅多清舉豪
すせん。左小股大々便利。次小向次。主通岩船。余
則堅主壁。平九筋。主種。東車。左作秀室。主と室。主家筋

空右小安達後内盧連。本沢源介。船井兵三。新井十郎。小
の壯士列す。奴僕宗六。駿と。も。鬱く。盃と。や。く。せ
き。早。く。辭と。け。く。け。つ。わ。詠。う。酒。並。と。ら。き。
や。く。改。よ。太。平。家。六。と。迎。く。候。付。て。曰。あ。人。事。れ。彼。因。人。
迎。く。通。方。へ。う。け。う。け。べき。の。約。定。今。日。許。う。が。般。了。
柳。舟。の。宴。と。ほ。た。り。は。酒。肴。盡。あ。人。ふ。授。の。る。こ。う。う。く。
一。盡。と。く。ひ。へ。と。食。々。と。あ。人の。奴。僕。え。ま。太。酒。と。好。の。
者。か。う。ふ。新。安。達。の。領。と。笠。て。收。え。り。限。なく。お。修。え。を。
變。而。酒。肴。と。と。く。次。の。間。と。そ。引。禱。し。う。ほ。三。房。
又。宗。六。と。ひ。て。あ。く。ひ。く。辭。され。ば。青。な。ぐ。海。み。つ。
寐。へ。き。の。る。ぬ。ら。壁。む。か。ま。り。に。絶。寂。然。あ。い。じ。に。今。宵。

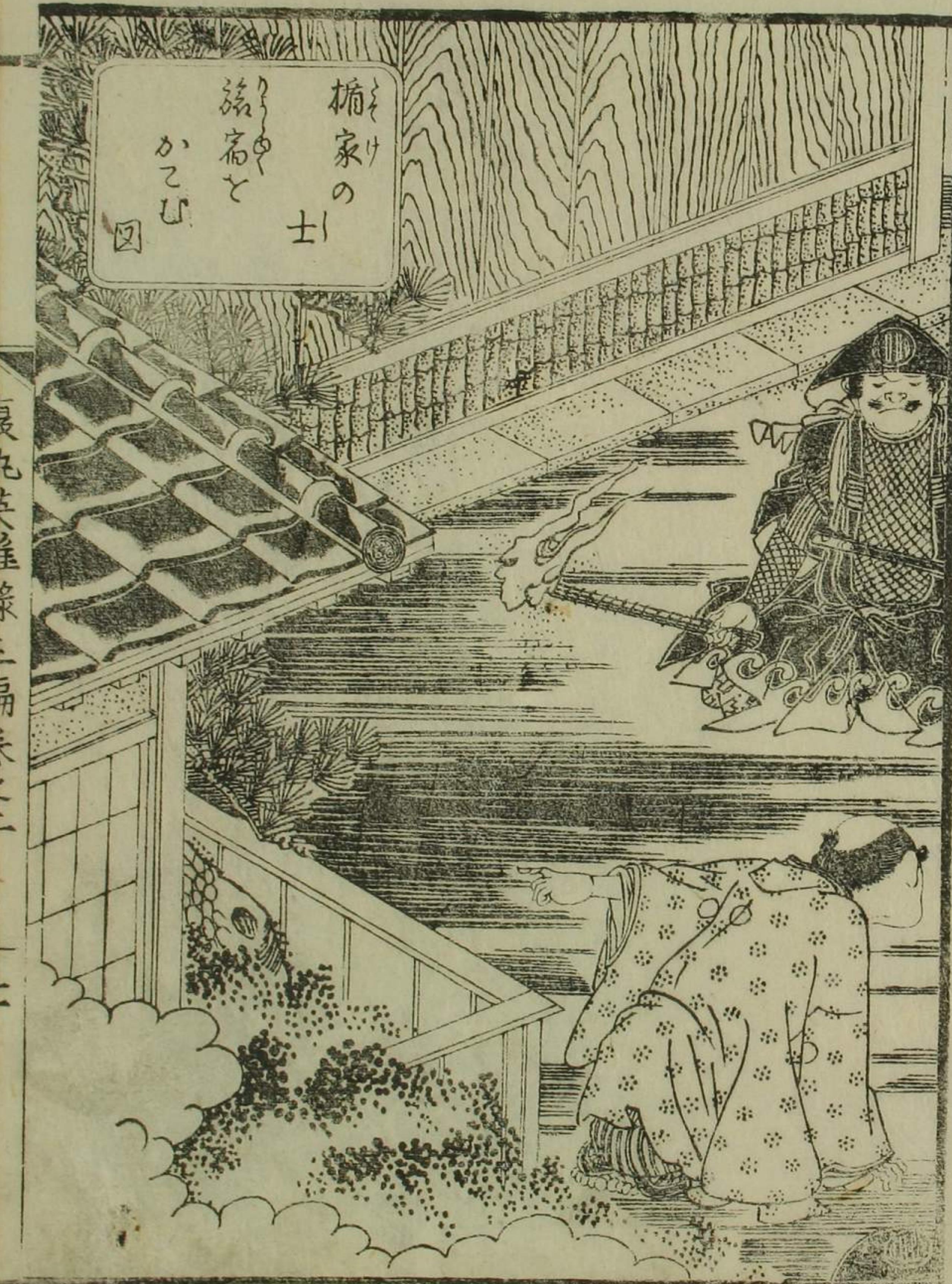
二階。小。康。の。渡。と。か。と。べ。と。令。され。ば。宗。六。畏。て。篤。宿。
の。下。女。と。而。二。階。よ。蚊。帳。と。た。き。と。せ。夕。れ。ば。野。が。草。
や。ぐ。と。構。上。よ。生。而。涼。じ。宿。と。そ。お。あ。く。る。太。平。室。云。
の。あ。人。と。な。み。く。傍。人。よ。あ。か。く。と。く。あ。く。ば。
と。辞。と。う。け。く。酒。り。り。小。縁。帳。の。あ。う。み。と。が。う。け。つ。と。く。あ。
う。せ。與。と。絲。う。せ。春。酒。の。あ。う。み。と。が。う。け。つ。と。く。あ。
あ。二。階。立。て。寝。う。る。様。ふ。と。と。夕。月。の。入。と。び。待。う。
う。
あ。二。階。立。て。二。千。石。の。土。船。代。す。酒。肴。井。お。と。酒。肴。づ。ひ。ふ。
さ。紅。ふ。立。て。二。千。石。の。土。船。代。す。酒。肴。井。お。と。酒。肴。づ。ひ。ふ。
逃。う。せ。と。然。ふ。小。股。白。波。ま。紅。蟹。の。面。く。と。思。じ。や。う。ふ。邊。と。

誠せしむ。外而よりやうせ。ゆき湯へゆきとあとみ止まつ
あくまで死をどしう。お二階ふ寄るまやふりとほしきが
皆三に町す焉延くうと思ふころ。同二階と山内知能く
兼て地理をや知くうけん。や法寫教の彰ばくひ。傳下と
もそれ小徑よより。ひづともちく逃去する。奴僕が
さゞやく酒宴ふまきうれて是とある者なく。毛とより
短き夏の装の二更も既ふ立てうきう

吉野薙針露頭之事

千姫後。禪院より東日流の波晏室へ候者と蒙たる。桶
若水舟成実へ。去る八月廿六日ふま御承と遣きてよう。道の
中ど多うりうだ。日なうべ。東日流の城下ふ焉。瑞鎧と

宮子や否。先其室の主と以て、岩見が事と結婚する。お
毛良おかくがきて。是酒一社。波晏家ふゆて。
岩見重内乃び。主と仰とひ。老翁とうけ乍らうべ。且
内野の内内よ。尾道斧刀さんじ去人く。又よ安あくぬ名をそ
ひ。波ふ近うる殺傷通電の人有とうけなまうべ。あくき
だもうち野弥寺坊といふ人こそ實知らひ。夫ハ高殿左衛門祐
頃忠への追尾なつしが。昔年有都へ候者と蒙られ
ぬ所よ。明業を申と殺害せらる。ゆくふ永の西郷と本
國と云うれてひ。もはいのく。さうれ。年少も及ばずと
若々とば。成実櫻うそ仰者よ。安うけたと。打うちつきく。
早速。主役筋より去達て。波晏左衛門坊頭忠ふ



褐而主人輝峯の座事と是而右多野が入込へる時
始て仲形殿より而よりへども。多薦の古便者と有り
候。多便不滿爲墨。乃窮ふうかゞひ奉る所無いと。述
く。それば顯忠打きごとに殺すて曰。勢。曲盡す。
熱使と發あす事と無亦家中み於て無拘する惡事と
居一者。平代又勤てハ未少も及ばずと有る。素多野
詠き語す。傍邊く勤くしめの行跡の若からざり
事共と被知れ已よ昔年。ひとまと麻セタの程古主
の名と假す。他家と作し奸歎。主く憎びれ者也然そと
高家と思へやれて、を跡とくとく。是ヤと便者小柄
哉。左京兆輝峯と云。芳賀がにじりきこそく。右曲者

彼ハ多處處とう石捕死刑又引よび者うれをせまと謂し
罷されば多家よ死一氣せん後捕て魯べく刑法よをせ
らうべくと育て厚く脚実と勞ひ答あつて。輝峯へ
輶轄と認られ。別々侵者と縁てはひ卦せんと有と。威实
固辞而曰。捐家と思へや。トシトシの五難今多くへど
己ふ重すやとの所を説かれ。太祖ふ歎の癖者とぞい。然
ふ許へ古便者。たまうりと聞りて。忽ち蹕とくとく逃
せんが必定みくらばよく外臣。威实ふ古便者とぞい。然
と乞うけく。遂ニ彼家の歎とありぞれ。坐よ東日流と發
きて。蓋道といふだらば。此者又席威实。智惠深き
者かうされば。途中よとして彼の便者。井田志かとづる

者小波畠家の様子をま食。とておとせと
せ。楯上野众が郎とてぞきらでさる。おひまくさりきの
頗遠きをうされば、成実が又月先達て、六月六日の初まと
過る頃へ車の脚下ふる。楯上野众政家が郎又か事
つけ。成実が書翰を如して、信東日流ふる一伍一什と。濱吉
小半びされば、政家疎了て、系と号ひとぞ遠きと賞
て、車み徳方へ人ときらせむ。まよやくして、从事め
涙絆及むきを。湯主旗奉始終ときくそりゆひと
吾乃有べきと思ひうるが故。始小波畠家へあざるや
くろく友人節を候までもなく。時刻とうづく。被葬者
共と云捕嚴持向ふかべどと。筋を拘て令せられうるべ
の擇人とた玄があくび。まよの者十余人。ち野が孫彼
の孫へと拵寄。先端紋の主と以知りて、ち野が孫作と
向ふ主の曰。主人に今夕賜酒宴と遣されていが多處。二階
小寐られ。奴僕あんま次の間よ放。重盤小向ひ否いと。肴
うのうちせが孫子と。うりへく述うれば。員あらはるふ
袖取しづぶ端込てからめられよと。一同よに入られ。太平
宗六のあんばぬまでも。お盆と拳て。己をわすれ。寛樂が
うるが是と云て。お盆を逃げんと。沙政代の者

龜
かくろく。丁ど陽例。若もあく魂をかけうるよ
よ。の後車。二階とやがけかけ上り。坂路の陽切て落日
餘の後車。二階とやがけかけ上り。坂路の陽切て落日
中大人の新たかなく。お松而也。紫毅もさくへきと。安
風と吹て逃走たと。見くわづ外方。主奴ふ白状させよ
とく。大平宗六と庭より居。主聖が行坐と賣問され
ざむ。もへ音ようの次方と達主人拳豪。二階ふみ
みずれひと。色思ひひと。音くふ舌もまつくる役ふ
碎ちとくと。鐵刀で放うち面く。賣問されば。も人
若よ堪忍ちて。出城下へ來し。二か松又放せ給。准備
とす。まとう。南放浦道へ移る。山城下へ。さうじ程の
こゝとふとくべゆく。ふも二か松へ。是鄉とも居つてやべき
と。兼そのや合せぶりとて。途中の宿まで。悉白脚ふ乃び
多き。角も角。すうて。御。が慈黨共。岩期ふ没てありし
やう。逃れま。白石浦と追び。虎て石捕。ごそそとて
捨被の主。乃び主。主と。元識。者。二三人と。見ふ立
大平宗六。嚴い。もあひて。忠勢十金人。長町
増田と。そとぞ追うけふ
姦黨悉被召捕事

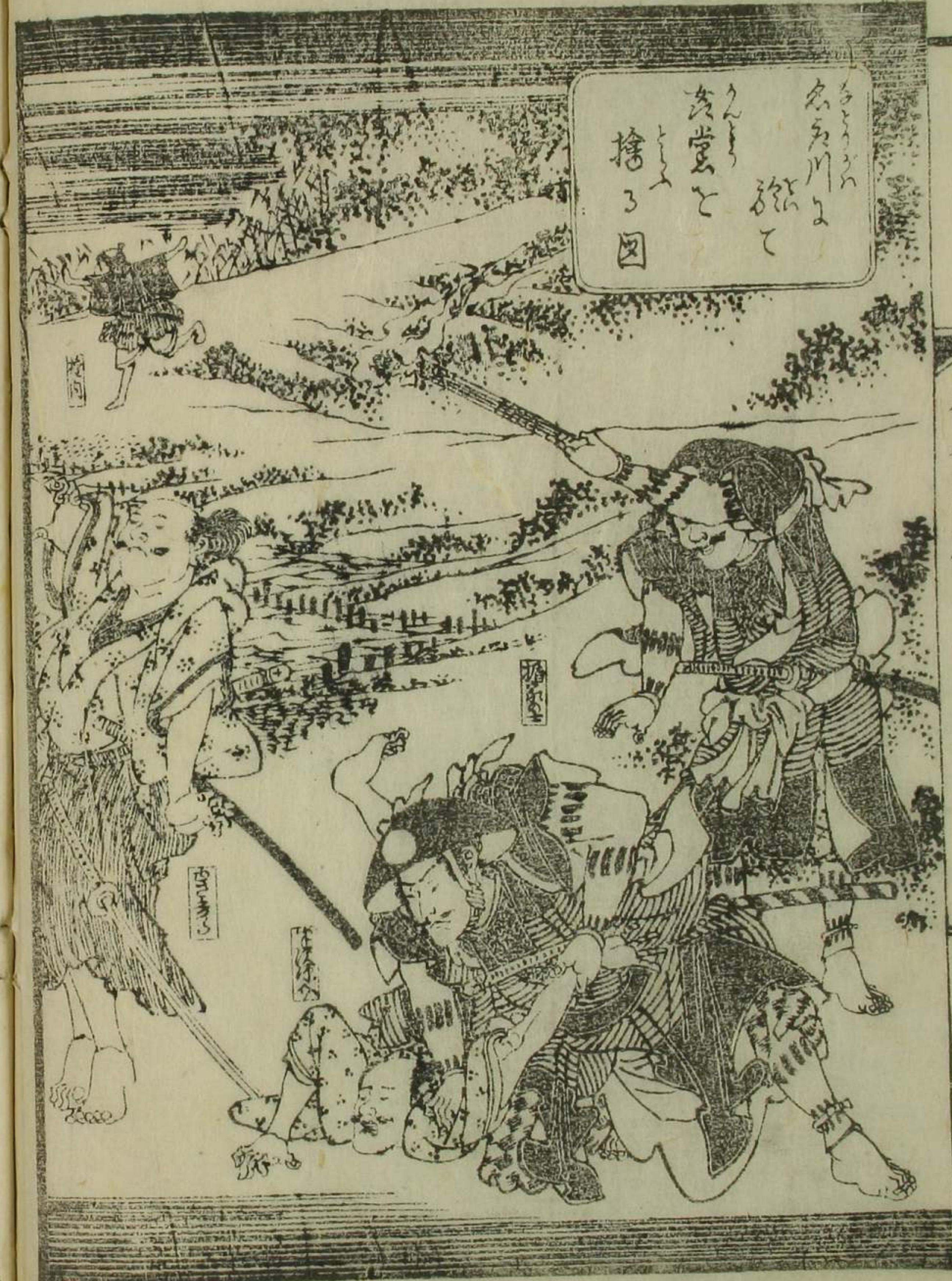
却後多野。弥彦。小後十人の者共。其よまぎれて。函下
の捨被と逐電。二年松と志て。落竹。うつ。ひとよ。あのが
やうに。きる。乃。それ。が。互ひ。小。竹。や。も。れ。と。かく。周。立。筋。か
か。り。の。速。と。も。う。せ。う。や。う。く。も。あ。き。ふ。逃。う。う。う。

二か松の者共に個々名取川の邊りみて扇合を下ふ。而り
船渡されば先准体の張灯ふ。二か松の源主畠山家の舍下
ひりこうとすりほきて。後守の家存す。安達擅内戸と
打叩て是の二か松より捕敵へ侵せ。考ふく。御用果く。其事
ぬ落す。すなむ。復く兵と知れべし。爰又源代とあるべきぞ
と云入を。源守准と云く。故將より這出事て。安達
等と云く。打見て曰。移幕中もものもじ。乞きゆふす。
と。一切なる中用をそぞりあんりで。源守准のう
さんぞ。古連の古人教而已。よひ平と。やくなれば。安達擅内
うあづきて。曰。於はかく。せんもあきど。支へゆく。本
生が先。あとと渡せよ。と。其の白服と拭ふ様て。あく

と。と。源守准は怪び。是れをものの事也。多き擇のものと
ぬ。來り。傍く山廬几み候て。ゆきと。言語て。隣のうえま
ねる。安達もへひりあがむ。是れをく。縁する。康ん。縁ぢ
かく。待あく。うれやうて。隣のかくれ人言ひて。張灯し
はれ。と。者三人出来り。是れ。源守の歩手と見る。あま
あじて。又人の兵士。跡よひ。と。迅風の紀がやく。かけ牛う
中。や。寛竟の壯士大音。曰。你木姫城。據ち。と。ち。兵を
と。修よ。と。かく。かく。と。と。と。セ墨を。今。ま。と。と。
逃んと。馬。車。と。御有んと。知く。備上野。今。が。持捕。と。と。
て。半柳。由捕。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。

さへも不敵の安達達肉。ふきの捕人よ肝と消鬼かくの
返答も仕ゆるうと。血筋ふくらむ野猪井十夜
進御。卑柳ふ向ひ、りうふもももも野猪井十夜
武術の跡え。被を女敵、岩見まきを御があこと追ふ次
脚穿の好と吸分を刀馬がなめかけ地よりれども。被岩見
己ふ捕家よ捨とぬ。が故室豪統とまづく。内藤ふ御
あやう城。姫城かくうなまく。奇怪なう、あわてて急外に
桶家の主と用捨ひかれどと刀の柄よもとかけく。害が切
と捕え。お御由浦町とわゆ。されば童子あぐり
者との、ふる力さんどかくもつたとゆけや。捕家よ放卑柳
は捕あるキとあくそりう。卑柳煙館が斧とじゆく。縛

とうけよと。喉ちづく。すばゆ今まづく。宣言無量あり。
今嘗つて死の危うい。波しづば。あく俾てゆづくぞと。河
岸まで召んとすると。お御由浦町と寢て寝よう。片襟
ちよよもんをだしが。枕極て大地よ槿と投げくと。配
も立度一人の役卒。押て魂と窮屈ん。寂れ。壯士の小兎とあつよ
かく。お御由浦町のあく逃れぬふくやあひる。一同よ抜る
ちて。お御とめがけて切てがくと。た右の役卒これとまく。文隨
さん入ふ業忽ち人づ刀と打合へ。きよと縛て捺倒へ。ちよ
くもふぞいす。あく。安達達肉は先別よう。あとをまぎりしてあくう
うう。お御由浦町。残ふくちふ。邊見牛て逃のきつ。もと朱
からまくまく。増面と離て曲りぬ。あくもとと行會へ



小股白波黒船を參る事年未見未だ有る。捨内
坐力と得る相あく。名古川の事もと。鳴かんに従う
タ色べ。あらんホモトヨ聲すれ。無くぶたとからて。も放満道と
行へ。おれへ。うち節が来るやと。往合せ。取扱え。亦幸
ちうとぞ。世人共ふ打連て。戦ふと引く。向のめく
より。一人の入教。宣張推し。かけら形勢。ひく是す循家
より。追人とかけ一老きんと。お波の歎よ途とうきゆい。
あきれ果て。ぞ五うき。はぬ押ある。一年の人教へ明提
幡。沙路奥ス帝榜周邊。十余人の徒士と石舟立て。堂く
とて。追ある。道へ一筋往還の外。又避れ西もあく。あれ
そまく。七人へ。又み出ださも地よけ。ばばづれ時ふ
そまく。

石橋の弓みふ入込。壁はひ。波とくや逃亡。言ふせと。這ぬ
ぢうふ逃とひ。眼とくも。し沙路榜周。がん焼そと。透
えと。這奴あぞ曲者。石捕と。つをどこそあれ。捕人の面く。地
理と知る頃を。されば。小徑と。廻り畦と。ひ。三方と。追
やど。ふ橋う。河蟹川の橋の下。ふく。世人と。の。追従られ。せん
かくひきて。小股大。思白波冥原。岩船。多々。萬本。馬舟。ま車
平九郎。赤見軍。大安達。後内。今。は是まで。つと。とく付近せよ
と。ねきつとて。切まる。一世の勇続あくと。そくひ。透よう。か
く。んくう。色ども。波底とも。右左の波士。波ふ。武湖。ふ名と。波し
案。坐共。居せば。立ひ。上。波。下。波。と。戦つ。やく。そく。と。あき
よ。寢よ。波。打ふ。と。當時。小。尾。と。ぞ。かけ。う。くる。波。波。榜。周

捨擣而曰。遠奴等生。汝等引牛。主府の衣裳搜せよ。七人の绳付引ひきせて立場。わしも早柳を捕がれ候。木波斎井とかくらへ。安達瘦肉があとを追てあくたうふ端合て。先づ飯の主として。足をりゆふ皆元あくあら野が毒黨あく意に捕たまど。群首の耳鼻湯舉臺。うごくれば。何は手逃へ。乃方面白也。もとて。先安達瘦肉とあらひげ。海を隔てて居候ときをうか。遠瘦肉。太狼毛貌。きりかねぬぞ。弱き者。きりまれば。忽面白也。と古今有縫被ふ。終る悔と生く崩し。主野へあくひゆそ。さう。れも縫被を計置け。ぬすむとあらひて。二年ねと生食人。

と。固綱せり。車駕ふ先へ立てる事くも。つそどとくに持り。ひで。往令をつたゞく。あくどうありかけも。うんばこと。今も有の事をほ。まば白眼。乃び一う。負ふ筋打きて。家。みのきのう。実は曲者。縁よろとからく逃失。やう小窓。う草とからく。れべ。とくに。近小野へ。候車とくら。役へ。觸く。捕へ。のよあと。とくに。坐。坐。十人の衣裳と。殊教ひゆ。だふ引立。き。早柳と。候ふ。並後と。園橋下と。とくに。引取け。の。のよ。衆已。か。あく。も。の。の。湖風涼しき。ゆふぞ。あく。

